

ひと

太平洋戦争中に沈没した艦船を撮影する写真家

たなか まさふみ
田中 正文 さん(48)



きっかけは、水中写真コンテストの審査員として招かれた南洋の小国パラオだった。大統領夫妻に誘われ潜った海で、多くの日本の旧軍艦艇の残骸を目にし、衝撃を受けた。

サンゴ礁のわきで眠る朽ちた沈船群、泥に埋もれた鉄兜や軍靴、海底で翼を広げる艦載機。太平洋戦争の激戦地がもつ別の顔があった。

「断末魔の叫びを上げて海に没した瞬間がよみがえるようでした」

足かけ5年、約260時間の潜水で17隻を撮影。各地で写真展を開き、昨年、写真集「パラオ・海底の英霊たち」(並木書房)を出した。

「自分探し」に苦しんでいた高校時代、全国を放浪してたどりついた沖縄で海に魅せられた。出版社勤務を経て93年、写真家に転向。世界の

海で「癒やし」の風景や生物を追いかけていたが、6年前、パラオ行きを境に沈船調査がテーマに。「足元にあった戦争の傷跡に気づかずしていた自分が恥ずかしくなった」。海底で長時間作業をするため、英海軍も使う特殊な潜水器具を操る。

昨年5月、山口県沖に沈む戦艦「陸奥」を調査。同8月には学術研究者らと、水没した日本の戦争遺物を調べる非営利団体「水中文化財環境調査協会」(千葉県市川市)を立ち上げた。その初活動で7月には北海道・小樽沖で貨物船を調査する。被写体にこだわるにはわけがある。

「見捨てられているのは鉄くすじやなく、その中にいた多くの人。そこに日の光を当てたい」

文・谷田邦一 写真・筋野健太